

要旨

多死社会が到来した日本において、死の受け入れ場所の確保は、高齢者医療の重要な課題の1つと言える。厚生労働省(2020)によると、今後も死亡数は増加を続け、ピークを迎える2040年には約168万人に達する見込みである。しかし国の財政削減の影響や、医療介護の人員不足などから、いわゆる「看取り難民」とされる高齢者が発生する恐れが懸念されている。加えて多くの高齢者が自宅での看取りを望んでいることから、厚生労働省は地域包括ケアシステムの構築の実現を掲げ、病院医療から在宅医療の移行を推進している。しかし現状では、在宅医療は普及しているとは言い難い。

高齢者が急速に増加するなか、在宅医療における終末期の検討は、今後の地域医療での重要な課題と考える。そこで本研究では、多くの高齢者が希望する在宅医療を実際に受けている患者に着目し、在宅医療で終末期を迎えた患者の現状と課題を明らかにし、尊厳ある終末期について考察する。

本論文第1章では、先行研究として日本の医療福祉の展開を理解するために、戦後から現代までの医療福祉政策や看取りに関する変遷を整理し、さらに入院医療と在宅医療の相違点を踏まえながら、在宅医療の現状と課題を検討した。第2章では、本研究の研究対象者となる訪問看護師4名とケアマネージャー5名へのインタビュー調査の概要と分析方法について整理した。第3章では、インタビュー調査から在宅医療で終末期を過ごす(過ごしていた)患者19名と家族8名の実態を明らかにした。

その結果、患者と家族の多くは、「満足」、「多少不満も感じているが入院に比べると良い」と感じていることがわかった。しかし患者の中には終末期にさまざまな問題を抱える者も存在し、訪問看護師とケアマネージャーは患者の意思尊重を根底とした理想の終末期と、現実にかかる狭間でジレンマを感じていることが明らかになった。具体的には、急変時による家族介護者の揺らぎや、単身世帯患者の自己管理の難しさ、また金銭的な理由から終末期の選択の限定などが挙げられた。これらの問題を生活状況に応じて「家族介護者のいる患者」「単身世帯の患者」「生活困窮状態にある患者」に分類し、それぞれに生じる終末期の現状と課題を検討した。

第4章では、これまでの研究を踏まえて、現代社会の影響から老いをひたすら予防しようとする傾向と、今後求められる尊厳ある終末期について論じた。

終章では、超高齢社会に求められる社会のあり方について結論を述べている。